

魔動少女 はぐる☆まきな

パール@ヌベスコード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あらゆる世界観が雑多に混ぜ込まれた世界、ゴツチャラワールド。

島国トルボクスに住まう高校生うじもりまきなへ氏守時那ときなは、突如現れた謎の怪物へマジンマジンに襲われてしまう。

彼女を助けた怪しげな男から受け取った変身アイテムへマジアコネクタークターで、人々を襲うマジンを成敗するへ魔動少女 はぐる☆まきななとなった時那が時に笑い、時に怒り、時に悲しむ冒険譚!... 冒険譚?

目次

第一動	突然!?魔動少女!	1
第二動	マギアコネクターの謎	11

第一動 突然!?!魔動少女!

「… あれっ!?!(こごと)!?!」

氏守時那は困惑した。

地獄のような暑さに汗の滴る… ナイアガラの滝のように溢れ出る夏の一日。

高校一年生の多忙にも程がある一学期を、それも優秀とは言えない脳を回転させ、どうにか夏休みという一大イベントに辿り着く。

校長の一秒を一時間に思わせるほど長いお言葉に耳を傾ける事なく眠り、果てしなく続く宿題の束を嫌々受け取ったの、ようやくの放課後。

一目見たその日から心ときめいた二年上の嘉月 早緑先輩に、どう言葉をかけるか、どう夏祭りに誘うか、どうアタックしてネチヨネチヨしようかと悩みながら歩いていた、そんな日の帰り道に。

こんな、子供のおもちや箱のような、終わり側の祭りのような… 片付けのされていない、混沌とした世界に迷い込むなどと、思いもしなかったのだから。

「うええ…?建物曲がつてるし、浮いてるし、何より空が明るいというか… 蛍光イエローというか…」

冷や汗を垂らしながらまた一步。

風邪をひいた時の夢のような理不尽極まりない風景に、多少の事では笑ってスルーする彼女も、この悪夢のような光景にすっかり弱気になる。

「はっ!もしかして… コーラの飲み過ぎで、酔っちゃったかな… ってそんなわけないでしょ!」

どうにか恐怖に怯える心を、セルフツッコミで無理やり奮い立たせ、それから歯車の形の髪飾りを指で回しながら必死に考える。

入口があるのならば出口があるのが道理だ。

そう信じて脚を動かし続けるが… 現実是非情である。

「出口… 見当たらない!!」

外に通づる穴すら、一向に見つかりそうもない。

それどころか、同じところを延々と彷徨い続けている感覚すら覚える。

「はあく、もうなんなのー！折角の夏休みだというのに！我が青春の一ページなのに！海を堪能しようとおもったのにいっ！！！！もうやだあー！！！」

まるで昔のゲームを思わせる、縦と横の繋がったループ構造から出る事ができない。

疲弊した身体を休めるために壁に手を当てるも、力なくうなだれ崩れていく蒔那。

そう、壁である。

「…壁？さつきは無かった覚えがあるし…もしかして出口!？」

円環から抜け出せるのではと、壁に対して行動を起こす。力一杯つまんだり、引っ張ってみる…意外と柔らかい。

しかし悲しいかな、彼女が存外非力だと言うのもあるが押ししても引いてもビクともしないのであった。

「出口じゃないの…もうわけわかんない…」

希望を打ち砕かれ、がつくりと頂垂れる蒔那。

疲れ過ぎて、壁が生き物のように動いて見えるくらいだ

「…え？」

いや、「ように」ではない。現にソレはこちらを見ているからだ。

「あ…」

あるはずのない目としばらく見つめ合い続け…壁だったはずのソレはニタリと笑い、変形していく。

『Arrrrrrrrrrrrrrrrrrrr!!』

丸みを帯びた身体が角ばり、全身に棘が生える。蒔那の何倍もあるうその巨体。それは明らかにそれはこの世のものでは無い「怪物」だった。

「ひええええええっ?!?!」

とつさに怪物から距離を置くために、回れ右をして猛然と走り出す。

怪物は動きこそ遅いが、その一步はとてつもなく大きい。

少しでも速度を落とした瞬間、踏み潰されてしまうかもしれない。
「どうして私がこんな目にい〜!!!」

地面の揺れが強くなる。蒔那の必死の逃走を知ってか知らずか怪物も走り出したのだ。

『Moonstaaaaaa!!!』

「うわああああ!!!もうダメっばい!!!まだ先輩に告白すらしてないのにいいいいいい!!!」

大黒柱を彷彿とさせる巨大な足はすぐ後ろにまできている。

私の人生もここまでか。諦めかけたその時だった。

「伏せろっ!!」

「ひゃいっ!?!」

転ぶように…いや、転びながら地面に身を伏せる。

風切り音が頭上を掠め、直後に背後で何かが炸裂した音と熱が感じ取れる。

顔を上げると目元をバイザーのような物で隠し三角帽子を被った人物が、腕に取り付けられた機械から歯車状のナニカを打ち出している。

振り返れば、巨大怪物が体勢を崩し倒れていく光景が見えた。

「大丈夫かい?」

「えっと…大丈夫ではあるんですけど…」

手を差し出してきた人物に、お礼を言うべきなのだろうが…状況の整理が追いつかない彼女に、その選択肢が浮かぶ事はなかった。

わかっているのは、死の危険は避けられたという事だけ。

「ほっ…無事で何よりだ。でも、まだアレは倒せていない…隠れるとしようか。」

「あ、はいっ!」

緊張の糸がほどけ、どっと押し寄せた疲れに蝕まれた身体に鞭を打ち、蒔那は置いてかれまいと男の背中を追いかける。

二人は赤色光を放つ怪物から離れ、崩れたビルの影に身を隠すのだった。

「ふう…ここなら少しは時間を稼げるだろう。」「ゼエ…ゼエ…良かったあ…」

小刻みに酸素を取り入れつつ、蒔那は目の前に座る命の恩人をもう一度見る。

世間一般的な魔法使いを思わせる三角帽子。

腕には、歯車のような物が二つ取り付けられた謎の機械。

半開きのコートに、薄く黒いベール。

極め付けに目をバイザーで隠したその姿は…

明らかに変人のそれであった。

「ひよつとして、もしかして…変態さん…?」

「声に出ているぞ…」

助けてもらったにもかかわらず、そんなことを思うのはまことに失礼であると言えるだろう。

口に出してしまうのは言わずもがなである。

だがしかし彼は変態的な姿をしていたのだから仕方ない。

「あと、えーつと…助けてくれて、ありがとうございます…?」

「(疑問形…) どういたしまして。」

ようやくのひと段落である。だが、疑問は尽きることは無い。

「あの化け物はなんなんですか?それに、貴方は…?」

蒔那のその言葉に、彼はニコリと(口元だけではあるが)笑う。

「アレはへマジンだ。突如現れては空間を歪めて人々を襲っている。」

「じゃあ、この場所も…」

「そう、あのマジンによつて歪められて…私は、人々を襲うマジンを倒すために作られた組織の研究者なのさ。」

腕の機械を調整しながら男が言う。

少し低めのその声は、何処と無く憧れの人を思わせるものだった。

「…勝てるんですか。一人で、あんな化け物に…」

「勝たなきゃ、いけないんだ。私が負けたら、無辜の人々が犠牲になる。」

無謀だと、彼女は叫びそうになった。

何故かは、わからなかった。

『Mooooooooonnn!!!』

「ぐあぁっ！」

「あっ……！」

マジンから伸びた触手が、彼を弾き飛ばす。

腕の機械が外れ、歯車が一つ砕ける。

巨大な怪物が、無防備な獲物にトドメを刺そうと無数の棘を向ける。蒔那は思わず走って落ちた機械を取り、彼を守るかのように立ちはだかる。

「何を……するつもりだ……！」

「……私は……私は戦う！ 貴方のために！ 私のために！ 私の……私の大事な夏休みの為にっ!!!」

邪魔だと言わんばかりに、棘が二人をめがけて発射される。

絶叫が歪んだ世界に響く。

だが、それは二人には届かない。彼女の想いに答えるように、魔法陣が展開され。

〈マジアコネクター！〉

機械が自らの名前を詠唱し、蒔那の腰に巻きついた。

「マジアコネクターが反応した……!?!」

驚きを隠せない研究員。あの機械は、適合率が無ければ使うことから出来ない。彼自身、自らの適合率を無理やり引き上げて使用していたのだ。

「……へ？ 何？ なんてくつついて……熱っ！ 頭熱っ！」

髪飾りが突如発光し、彼女の髪から外れていく。

壊れて無くなっていた歯車の場所に、自動的に装填された。

〈マジックギア！ マシンギア……ギアコネクト!!〉

歯車同士が結合し、光り輝く。

警戒し、後ずさるマジン。

彼女を助けるため、立ち上がろうとする研究員。

顔を上げた蒔那が、口を開く。

「……えと、……からどうすればいいの？」

その言葉に、研究員とマジンがほぼ同時にずっこける。
当たり前だ、彼女は一般人なのだから。
変身の仕方とかわかるわけがないし。

『Aaaaaaaa!!!』

「ぎゃああああああ!!!」

先ほどの威勢は何処へやら。

怒るマジンから逃げ惑う蒔那に、研究員が叫ぶ。

「レバーを押せ! そうすれば変身できる!」

「変身!? レバーって... これかなっ!」

右側についていたレンチのようなレバーを... 間違えて押し上げる蒔那。

「ふえっ! 壊れちゃったあ!?!」

「あー! そっぢじゃない! 落ち着くんだ!」

極限状態で混乱した蒔那が、どうにか押し倒そうとレバーをグリグリと動かす。

どうあがいても下に倒れない。マジンが近づいてくる。急がなく
てはならない。

「あーもー! こっちはどうなの!!」

時計回りに、レバーを回す。どうにか元の位置に戻ったようだ。

〈マックス! ギア! モードッ!〉

その音声を聞いて、研究員が青ざめる。

「な... つーマズい! もう一度最初からやり直すんだ!」

だが、彼女には届くことなく。

「戻った! おりゃああああ!!!」

「あ」

レバーが、倒された。

歯車が噛み合い、勢いよく回転する。

溢れ出る力に、押し返されるマジン。

人の姿と、機械の絵柄が表示された半透明の魔法陣が、彼女を前後から変化させていく。

〈Ready to roll!? マギアライズ! 機械仕掛けの魔法少

女！マジックマシン！パーフェクトコントロール！
魔動少女。

魔法と機械の力を併せ持つ、戦士が誕生した。

「… おう？へ？ええええっ!!!何これっ！これが、変身!？」

「変身した… マックスギアで、意識を失わずに…！」

まるで別人のように姿が変わった事に驚愕と興奮が隠せない蒔那。そして、目の前で起きたことが信じられない研究員。

「これなら… いけるっ！行っくぞおおおおお!!!」

右手を握りしめ、力を… 魔力を凝縮させる。

余剰なエネルギーは全て背中の翼と一体化した推進装置に回し、一気にマジンの懐に飛び込んでいく。

「おりゃあああああっ!!!」

『G… A a a あああA A A A A!!!』

速度と魔力を乗せた一撃が腹にめり込み、一呼吸置いてからカツ飛んでいく。ビル群にぶち当たり続け、崩れていく身体からギア状の核が見えてくる。

「うわあああ… 被害大丈夫かなこれ…」

「アイツを倒せば被害は出なかった事になる！速く、トドメを！」

滝汗を流す蒔那を現実に取り戻すために大声を出す研究員。

叫びすぎで既に喉がガタガタになっていたその声に、どうにか反応する。

「トドメって… どうすればいいの?」

「レバーを… もう一度倒すんだ!」

「おっけ！よー！よー！し… せいっ!」

吹き飛んだマジンが、自己修復を行おうと立ち上がろうとする。

だが、それよりも速く、蒔那がレバーを押し倒す。

へギアコネクション… オールクリアー！

四枚の巨大な歯車魔法陣が噛み合い、マジンの動きを束縛する。

推進装置から高熱による光が溢れ出し、蒔那の身体を押し出す。

マジンの身体にまでガイドレールが敷かれ、そこを勢いよく突き抜けていく。

「いつけええええええええええ!!」
へギアリンググフィニッシュ!!!」

『Gyoaaaaaa!!!』

魔法陣で体を抉られ跳び蹴りを核に叩き込まれたマジンは、その衝撃とエネルギーで大爆発を起こしたのであった。

「やったー!って、わあああああ止まらないいいいいいい!!!」

速度を落とさぬまま、地面にぶつかりクレーターを穿つ。

「あいたたた… たははー、まあいいか!」

ズタボロになりながら這い上がる蒔那の顔は、もう怯える少女の顔では無くなっていた。

気づけば、青い空が暗くなっていた。

どうやら元の世界に戻って来れたらしい。

研究員も、もう既に見えなくなっていた。

「もういなくなってる… ん? 何だろうこの紙?」

【蒔那君と話がしたいと、上から連絡があった。

時間に余裕がある時で構わないから、是非来て欲しい。待っている。

M & P ; G W . C o 研究員K】

「ふーむ… 明後日にでも言ってみよっかな… って、いつけな
い! 門限に遅刻しちゃうじゃん!!! 急げー!!!」

名乗ってもいないのに、何故彼が名前を知っているのか。

そんな疑問すら抱く事なく、蒔那は自宅への帰路をひた走ることになった。

薄暗い部屋に、男女が二人。

別にいやらしい事しようってわけではない。部下と上司、それだけだ。

「ただ今戻りました、ミザリー主任。」

「おや、ガラガラ蛇より掠れた声になって…。いやはやご苦労だったねえ、K…。いや、嘉月早緑くん」

蒔那への指示で喉が掠れた早緑にのど飴を投げながら、上機嫌な彼女…。ミザリー・オルークトはケラケラと笑う。

「久しぶりに喉を酷使しましたので…。その、あの子ですが…。」

「そうそう、氏蒔那ちゃん…。あれは実にいい子だねえ。マギアコネクターとマグナムギアを失った以上の成果だ。」

対照的に、彼…。嘉月早緑の顔は暗い。

守るべき市民を…。少女を戦いに巻き込み、在ろう事が助けられるなど…。あつてはならないと思っていたからだ。

「…。ですが、彼女は一般人です。我々の戦いに巻き込むのは…。」

「んー、いいじゃないか。君だけじゃ負担も大きかったし、彼女自身、戦うという意思があるならさ。」

「…」

「もー、君は心配性にも程がある。既に社長にもお話しが通っているし？何よりこの大天才、ミザリー・オルークトさんが完全にして究極のバックアップをするのだから、万が一なんてことはあり得ないと思ってくれたまえよ！コーツコツコツコ!!コーココ、コホツゲホツ」

マッドサイエンティストの血筋が色濃く出た笑いを高らかに上げ、ついでに咳き込む彼女と、疲れによる思考停止に身を任せる早緑。

この世界の運命は、彼らと、一人の少女に託されていた。

とーびーこんでいにゅー

第二動 マギアコネクターの謎

「うぁー… あっーい…」

氏守蒔那が徒歩で行く。

マジック&ギアワークス社。手紙に挟まっていたチラシによると「貴方の生活を強力サポート！機械と魔法の旋律が奏でる美しい調べを是非貴方のお手元に！」と書いてあった。

蒔那自身にはそれがどう言う意味かあまり理解できなかったが、兎に角呼ばれてしまったのだから行くべきだと思ったのである。

彼女はなんだかんだで義理堅くお人好しなのであった。

「はー、よーやくついた… あっついなあ」

茶髪の短い髪から汗を滴らせながら、目的地に辿り着く。目の前には縦に馬鹿でかく横にも馬鹿でかいビル。

そして馬鹿でかい看板には馬鹿でかい文字で「M&ギアW Co.」と書かれている。どことなく、会社ビルというよりは研究所といった趣の建物だと蒔那は思う。

「ってあれ… ドアどこ…？」

早速お邪魔しようとするも、扉がない。隙間風すら吹かないレベルの閉ざされっぷりである。

壁に沿って一周し、唯一見つけられたのは小ぢんまりとした窓だけだった。

「あら、お客様ですか？どういったご用件で…」

「えっと、ここの研究員さんとお話したいんですけど…」

窓奥の黒髪ロングの、いかにも頭の良さそうな女性に話しかける茶髪ショートのちんちくりん。

「面会ですね？何か証明できるような物は御座いますか…？」

「… 手紙で大丈夫ですかね？」

バッグの中身をかき回し、手紙を差し出す蒔那。

それを見た窓口の女性は楕円の眼鏡をキラリと光らせて。

「まあ、Kさんから… これは失礼しました。扉をお出ししますので少々お待ちくださいね、蒔那さん。」

ガシャコン！と音が響く勢いそのまま地下から扉が飛び出し、自動で開く。そりや外から探しても見つからないわけだと思うのであった。「ありがとうございます…。」というかなんで私の名前、知ってるんですか？」

「うふふ、企業秘密です♪さあ、どうぞお入りください。」

「あ、はい！お邪魔します…。」

この人食えない性格してるなあと思ったかどうかはさておき、この暑さに耐えきれなくなった蒔那はそそくさと社屋に入って行くのであった。

「さて… Dr. ミザリー。蒔那さんがそちらに向かわれました。」

「了解したよーMs. ハルジ。あとは任せてくれたまえ。もう客人も来ないだろうし、自由にしてくれて構わないよ？」

「心遣い、感謝します。それでは。」

内戦連絡の後、扉を収納し休息する女性。

涼宮寺 春奈… ハルジが蒔那と共に並び立つのは、もう少し先になりそうだ。

開発主任ミザリーの技術と、蒔那が齎らしたデータによってそれが完成するまでは、人の通らない窓口を担当し続けることになるのだった。

長い長い、すごく長い廊下を渡った先の研究室の扉を叩き、中に入る。

「遠路はるばるよく来たねえ！待ってたよ！」

眼鏡のかけた博士の如き女性が微笑み、抱きしめてくる。

少しハリは失われているようであったが、柔らかな身体とほのかな甘い香りは実際心地いいものであった。

「(私より歳上だと思うけど、その割には髪の毛白いなあ…。ストレスかな?)」

「ふふん、これは地毛さ。」

「ふえっ!? あ、あ…。顔に出てました?」

「目は口ほどに物を言うとは言うが、あそこまでダイレクトに伝わる

顔はそう無いよ？」

出会って早々、失礼な事を考えてしまったな、と頭を搔きながら思う蒔那。

自覚がなかった訳ではない。彼女は無意識的に、思ったことがすぐ顔に出るタイプなのである。

「なーに、いいってことさ！若く見てくれてるってことだろう？嬉しいねえ、サービスしてあげよう！何か飲むかい？」

「冷たいジュースください!!!パインで!!!」

背を伸ばし、気をつけの体制でジュースを切望する蒔那。正直、最初は少し面倒だなーとも思ってはいた。しかし到着した際、ここまで大きい建物ならば飲み物とお茶菓子くらいは出してくれるだろうと思っていたのである。

むしろそれが目当てである。わりかし彼女は現金な性格であった。

「さてと… 申し遅れたねえ。私はミザリー・オルークト。このM&GW社で魔動装置開発主任として働いている天ツ才さ。」

「天ツ才…!?!」

そう、天ツ才である。天才に更に輪をかけて天才なのだろう。

自信満々にそう言われてしまうと、根拠がなくとも信じそうになるのである。とにかくすごいという、幼さすら感じる感想を蒔那は抱いた。

「フフン、何を隠そう！蒔那くんが使ったマジアコネクターは！私が作ったんだからね！」

「ふえっ!?!」

ドヤ顔状態でさらに口角を引き上げ、かつサムズアップとウィンクを繰り返す目の前のでえんさい。

普通の女子高生、氏守蒔那に怪物と戦う力を齎した機械へマジアコネクターの開発者を前に、蒔那は目を輝かせながら思わず口に出した。

…すごい人だ。と。

「そうだろうそうだろう！もつとその目をプリーズ！んんう快感…」

／／／

ミザリーは食い入るが如く見つめられた——尊敬の念やら何やらが入り混じった視線を向けられた事による興奮を隠すことなく、そのコップにパインジュースをドボドボつき込む。

表面張力によって限界まで注ぎ込まれた黄金水をバキュームの如き速度で飲み干す時那だったが、その吸引が突如止まる。

「貴女が天ツ才って事はわかりましたが… どうして私を呼んだんですか？」

「おおっと失敬！余りにも尊敬の眼差しを向けられすぎて、危うく本来の目的を見失う所だったよ！」

その言葉に頬を紅潮させ口元をニヤけさせいやらしく内股になりながら腰をくねらせていた変態は。

「じゃあ、話す——前に、マガリアコネクター持ってきてるかい？」

「あの機械ですか？バッグに入れっぱなしにしてたので… 入ってます！」

「おお、それなら話が早い！少し預からせて貰うよ… さて、これは君にとつても私にとつても。これは大事な話なのだからね。」

一瞬にして背筋を伸ばしたカリスマ研究員へと変身する。手元の機械を手渡しながら、一人の人間がここまで違う表情が出来るものなのかと。

一つの態度しかできない真つ直ぐな人間は感嘆と、少しの恐怖を覚える。

「実を言うとね、謝罪しておきたかったんだ。」

「謝罪…？」

時那には、それがわからなかった。

何故初対面で謝られるのか。

本来なら勝手に変身し、戦闘に介入した私の方が謝るべきではないのか。

そんな予想外の言葉を投げられ、困惑していた彼女の手を、悪戯が露見した子供のような——バツの悪そうな顔をして、ミザリーが手

を取って。

「もしかしたら、取り返しをつかない事になってしまったかもしれないからさ。」

その言葉と裏腹に、ミザリーの握る手は穏やかであった。

投げられた言葉の訳を理解できない蒔那は、言葉を投げた女性に連れられて、地下研究室の奥：更に地下に通ずる扉へと向かうのだった。

「もう既にKクンから軽く聞いたと思うけどネ？蒔那クンが戦った相手… マジンというのは、何処からともなく現れて人を襲うんだ。」

「… そういえば唐突に出てきた覚えが…。」

客人—— 氏守蒔那を連れて、ミザリーは更に地下へと進む。

思考停止の末、彼女が辿り着いた結論は「とりあえず今は考えないでおこう」という後回し。

自分がいくら考えても分からない事なのだから仕方ないのであるが。

「どのように生まれるか、どうして人を襲うのか。それは一切不明でねえ… 被害は増える一方だったのさ。」

「天才でも、分からないことがあるんですか？」

「残念だが、私は万能の人ではないのさ。次元湾曲空間の発生は特定できるようになったが、ソレも少しズレる可能性があるからね。」

「じげんわんきよく…？」

長い階段を降りる。コツコツと、靴と地面が接触し、また離れる音が反芻される。

蒔那としては珍しく、今日は考える事が多い。いつもは後先考えず直感に頼る事が多いのだが、きつと目の前の人の影響を少しだが受けたのだろう。

「有り体に言えばテリトリー、部屋みたいなものかな？… とかく、私達はこれ以上犠牲を出さない為に組織された。お陰で被害は一時期よりは抑えられた。けれど…。」

「けれど...?」

「まだ、完全に抑制できたわけじゃない。行方不明者は増えているのさ。蒔那クンもそうだったかもしれないんだぜ?」

「でも、私は」

「――戦える、つてかい?」

なんとなく、言いたい事がわかってきたような、分からないような気がする。

彼女の声から、心配の感情が窺い知れた。

蒔那特有の直感というものである。

巻き込まれる前から、戦いをしてきた者の背中。

それでも生き残った。戦えた。

巻き込まれたのは偶然だけど、戦おうとする気持ちは自分から生まれたものだ。

守りたい人と、守りたい夏休みがあるから。

そんな蒔那の言葉が終わる前に。ミザリー答え、が振り返る。初めて会った時と変わらない笑顔。でも、その底にあるのは...?」

「そう、君はマギアコネクターに適合した。あまつさえ変身し...マジンをほぼ無傷で倒したそうじゃないか。だからこそ――」

それはきつと、優しき、慈しみ。そして――高揚感だ。

この世界に現れた歯車型記録媒体〈マギア〉、そして〈マジン〉。

その二つを長年研究し、ようやく会えた最高の適合者。

目の前にいる少女があの時、それを。

現時点での最大出力での戦闘を行い、生き延びた事を知った時。

「もう君は無関係な人間じゃあいられない。先にキミがやられてしまわないよう、戦い方を知っておいてもらわなきゃね。」

ミザリーは、反対する者の全てを黙らせ、彼女を呼び寄せる事を決意したのであった。

彼女が、この世界で起こっている事件解決の最後の希望であると、この手で確認したかったのである。

マジック&ギアワークスカンパニー。

そこは魔法と機械を組み合わせたシステムを作る会社であり、突如現れた怪人と戦う為にマジアを解析する研究所であり。

そして、前線に立つ戦士を生きて返す為の鍛錬を積ませる訓練場だった。

「さあ、着いた。っとその前にだ。最後の確認をさせてもらおうよ。」

地下に広がるその巨大なフィールドを前に、ミザリー・オルークトは蒔那に視線を合わせる。

「マジンとの戦いは、過酷なモノだ。君の身体にも、精神にも…負担をかけるモノになる。最悪、本当に死んでしまうかもしれない。」

最初にあつた頃とは違い、鋭い視線を投げってくるミザリー。優しさや慈しみを隠しきれないまま、若き戦士を送ってきたであろう目を、戸惑いながらもしっかりと見つめ返す。

「氏守蒔那。貴女はその力を正しい事の為に…使ってくれるかい？」

「そんなの、今更だ。」

既に決めていた事だ。

「…少なくとも、私にできることなら！」

だからこそ、自信を持って返答する。

頑張れるだけ、頑張る。

今は、それだけの気持ちでも。

「…そっか！いやあれダメです！なんて言われたら流石のミザリーさんもズッコケてたよ！」

先ほどの180度違う態度に、蒔那は思わずズッコケた。

彼女からは見えなかったが、ミザリーは嬉しそうな表情で見えていたのであった。

「さあ始めよう!!丁度君が使ったマジアコネクターとの通信が終わったのだよ?ほら、受け取りたまえ!」

「うわわ!?と…」

投げ渡されたソレは、あの時使った変身装置…とは少し違う。

黒一色ではなく、金色に縁取られた装置。

輝くレバーに重厚な本体。

情報を読み込む為の機構が、電灯の光に反射する。

「いやー、まさかプロトタイプで変身するとは思わなかったよ！お陰でいいデータが取れたっ！コカーツカカカ！」

「え…つまりどういう事なんです？」

「あれねー、まだまだ調整不足でウチの人員じゃ変身出来るほどのD
EM値が無くてねえ。ぶっつけ本番で、しかもイッチバンパワーが出る
変身をしたって言うんだから驚いたよ。最悪気を失うかもしれない
いと言うのに、君は涼しい顔で戦った…なればこそっと出力を低
減して安定させた方が疲れないと思うんだよネ！そら、これも受け取
りたまえ！」

「うわわ!?つと…」

ケラケラと笑いながらポケットから二枚のマギアを蒔那に投げ渡
すミザリー。

最初に使った二枚とは違う色と刻印。

赤色の〈M o n s t e r〉、黒鉄の〈M o t o c r o s s〉と書かれ
てある。

「…えと、もん、すたー?と、もとくろす？」

「正解！流石に読めるよね…モンスターギアは蒔那クンが倒したマ
ジンから採取されたものだ。キミが持っていて構わないよ？」

「本当ですか!?ありがとうございます！」

「いいってことサ。さあ、変身を試みよう！蒔那クン用に調整して
あるから馴染むと思うよ？」

「やってみます！」

〈マギアコネクター！〉

腰の位置にコネクターを当てると、自動的にベルトが伸び、彼女の
ウエストを締め付ける。

互いの手を交差させるように、マギアを装填する。

〈モンスター…！モトクロス！ギアコネクト！〉

「いいねえ、装着速度も申し分ない！ではそこからレバーを倒してく

れたまえー！」

「逆に回さなくていいんですか？」

「あれは負担が大きい、つまり疲れやすくなるんだ。とりあえず最小出力にしてあるからそのまま倒しておくれ？」

「いえっさー！」

レバーを勢いよく倒すと、かつてのように人の姿と機械の絵柄が描かれた魔法陣がコネクターから投影されていく。

〈Ready to roll?〉

準備はいいかと、問われる蒔那。その意味を理解したかは不明だが

「…それではいきますー！変！身っ!!!」

その言葉に応じて、魔法陣が彼女に被さり、交差する。

服装と髪色が変わっていく。マジックマシンとは違う、新たな形態。正常作動したことに満足そうに首を縦に振るミザリー。

彼女の成果が、今一度進展した瞬間であった。

〈舗装を食らう怪力二輪…！モンスターモトクロス！パーフェクトコントロールッ！〉

「よしっー！」

「さあ、実験の始まりだ。」

とらーびーこんてにゅー